

Vanadium Award

論文誌編集委員 R.U.

私の同僚の話して恐縮ですが、「ISIJ Internationalに掲載された論文がVanadium Awardを貰った」と話しているのを聞き、論文誌編集委員としても興味を持ったので話をきいてみました。

4月中旬、彼は突然一通のエアメールをInstitute of Materials, Minerals & Mining(略してIOM³と言う)から受け取ったそうです。そこには、「Vanadium Award 2003の受賞が決まりました。6月15日夜にディナーがあり、そこで賞が授与されます。服装はブラックタイです。」といったことが書かれていたとのことです。Vanadium AwardはVanitecがスポンサーになって1982年から始まった賞で、Vに関する技術論文に対して授与されるとのこと。私もweb-siteを調べ、該当なしの年もあるので今回は19件目の受賞であって、英米の学術誌からの受賞が多いことを知りました。実は、この小文を書き立てた理由は、今回の同僚の受賞論文が鉄鋼協会発行の雑誌に掲載された論文としては初めてVanadium Awardを受賞したものであることに気づいたからです。ちなみにその論文の著者とタイトルは、Hitoshi ASAHI, Daisuke HIRAKAMI and Shingo YAMASAKI: “Hydrogen Trapping Behavior in Vanadium-added Steel”であり、ISIJ Internationalの2003年、第43巻(pp. 527-533)に掲載されたものです。研究成果が論文として雑誌に掲載されることは誰しも嬉しいことと思いますが、さらにこれが論文賞を受賞するとなれば喜びもひとしおでしょう。ご存知のように、鉄鋼協会の論文賞は、鉄と鋼やISIJ Internationalに掲載された論文から選ばれますが、このVanadium Awardは世界中の公表論文から選ばれます。同様な賞としては同じIOM³にNbに関するCharles Hatchett Awardがあります。どちらも、VやNbに関しての優れた技術論文に対して贈られるものでありますが、ISIJ Internationalの論文がそのような立派な賞の受賞対象となっていることを知り、編集委員としても殊の外嬉しく思った次第です。

ここで、賢明な読者諸氏へのお願いですが、もし論文にする“ねた”があるようでしたら、是非とも論文としてまとめてISIJ Internationalに投稿してはいかがでしょうか。ISIJ Internationalは最近インパクトファクターも高くなってきており、鉄鋼分野では水準の高い論文が掲載されているとの評価が定着しつつあります。従って、“あなたの論文”がこのような賞を受賞するチャンスも比較的高いと言えるのではないのでしょうか。

ところで、受賞した私の同僚ですが、生涯に一度くらいはブラックタイ着用の英国流のディナーに出席してみたい、丁度6月中旬ごろに欧州への出張があるかもしれないと言っていました。結局は予定を合わすことができず、授賞式には欧州駐在の知人に出席してもらったそうです。後日彼に送られてきたメダルを見せてもらい、VがSefströmというスウェーデン人により発見されたことを知りました。



写真1 左から山崎さん、朝日さん、平上さん

(2004年9月30日受付)

REWAS' 04に出席して

東北大学工学研究科 佐々木 康

2004年9月26日から29日にかけてスペインのマドリッド市内のコンベンションセンターにおいて開催されたGlobal Symposium on Recycling, Waste Treatment and Clean Technology, REWAS' 04に参加する機会を得ました。本国際会議の日程はちょうど秋田での鉄鋼協会秋期大会と重なっていたため、鉄鋼分野からの出席者はほとんどいなく、日本からの参加者のほとんどが非鉄分野の方々に占められておりました。会議での発表は約200件、ポスターセッションが36件でなかなか盛況な会議でした。参加者の多くはヨーロッパからで日本からの参加者もかなり多く20名程度はいたようです。興味深いことに米国からの参加者はほとんどいませんでした。また女性と若い世代が多かった事も目に付きました。発表の内容は6割程度が鉄や非鉄元素を含むダスト、スラッジおよびスラグの処理やそのリサイクル、残りが重金属を含む水や土壌の処理およびセメントや廃プラスチックの処理関係で、しかもそのほとんどが、現実には生じている問題に対してそれを具体的にどのように解決・対応していくかという、問題を解決するための研究が主体で、日本でよく見られるようなLCAによる解析のような研究は皆無でした。私自身、環境問題というとLCAなどによる解析が表に出てくる風潮に違和感を感じており、本会議の発表を聞いて、実際に答えを出し解決するための具体的手段を提案していく研究が重要であると強く感じました。Recycling, Waste Treatment and Clean Technologyという会議の性格から来るのかもしれませんが、会議全体での発表の多くがFerrous and Non-Ferrous Metallurgy、あるいはHydrometallurgyプロセスなどで培った技術を環境に

応用あるいは環境の面から捉え直したものでいわばEnvironmental Metallurgyとでも言うべき内容であり、環境問題の解決には、鉄鋼分野で培ってきた様々なプロセス技術そのものが使えるし、むしろその積極的な応用が重要であるとの認識を新たにした会議でした。スペインで印象に残ったのは朝8時になってやっと太陽が昇り始め、会議は最終日でも6時まで行われ、dinner partyも21時から始まるなど、スペインがかなり夜更かしの国であることでした。

(2004年10月5日受付)

協会の活動から

(社)日本分析化学会・(社)日本鉄鋼協会評価・分析・解析部会共催 分析信頼性実務者レベル講習会第6回金属分析技術セミナー報告

日本鋼管テクノサービス 石橋耀一

日本鉄鋼協会と日本分析化学会共催の金属分析技術セミナーが7月15日、16日の2日間ゆうほうと五反田で実施された。参加者は35名であった。今年から実行委員長は小熊幸一先生(千葉大工学部教授)から山根兵先生(山梨大教育人間科学部教授)に交代した。

金属分析技術セミナーは自社の分析技能教育プログラムの一部として参加している試験所も多い。事前に参加者にはJSSの鉄鋼認証物質が未知試料として配布され実技試験を行っている。講師は鉄鋼・金属分析の経験豊かな第一線の研究者、技術者が担当している。また、本セミナーのテキスト内容、講義科目も毎年受講者のニーズによって最適な内容に改訂されている。湿式化学分析の基礎である重量法、容量法、吸光光度法については、日本分析化学会編集の教育ビデオの内容も講師により紹介されている。今回改訂された受講者用テキストには各講師の長年のノウハウや技術検討・研究成果が盛り込まれており、市販のテキストにはない充実した内容になっている。セミナー受講者は非常に熱心に講義を受けており、講義終了後も活発な質疑応答があり、1日目の技術交流会の場でも講師、参加者の間で数多くの意見交換が行われていた。日本の鉄鋼・金属分析技術は現在世界最高水準にあるが湿式化学分析分野の研究者、技術者、技能者の減少が進展している。鉄鋼・金属分析技術の技術・技能伝承を図る目的で始めた本セミナーは非常に有益な技能・技術情報を得られる場でもあるので、今後も関連事業所の積極的な参加を要請したい。ルーチンで鉄鋼・金属分析を実施している受講者の実技試験結果は非常に優秀であった。最終日には統計解析結果(ロバスト法、Zスコアなど)をまとめた報告書を各受講者へ配布して技術的なコメントも含めた技能評価を行っている。

1. 開催日：2004年7月15日(木)、16日(金)

2. 場所：ゆうほうと五反田

3. 講習内容：

・第1日目(2004年7月15日(木)、10:00~20:00)

1)鉄鋼試料の前処理法

稲本 勇(日鐵テクノ)

2)非鉄試料の前処理法

川田 哲(エスアイアイ・ナノテクノロジー)

3)分離・濃縮法の基礎

山根 兵(山梨大)

4)重量法、容量法、吸光光度法

蔵保浩文(住金テクノ)

5)原子吸光法

高田九二雄(東北大)

6)技術交流会

山根 兵(実行委員長・山梨大)

・第2日目(2004年7月16日(金)、9:30~17:00)

1)ガス成分分析法

石橋耀一(日本鋼管テクノ)

2)ICP発光分光分析法

河村恒夫(コベルコ科研)

3)ICP質量分析法

藤本京子(JFEスチール)

4)機器分析法(発光分析法、蛍光X線分析法)

成田正尚(大同分析リサーチ)

5)技能評価、質疑応答

山根 兵(山梨大)、石橋耀一(日本鋼管テクノサービス)

柿田和俊(日本分析化学会)

6)筆記試験

なお、筆記試験と実技試験に合格した受講者には修了書が発行されて、ISO 17025の試験所認定時の実績としての評価対象となることが各試験所認定機関で合意されている。

(2004年9月24日受付)